



E-JUST教員・事務職員との定例会議。新しい大学作りへの意欲は高い

## 現場を理解し、最適かつ最善の判断と対応をしたい

E-JUST設立プロジェクトの専門家として現地に赴任している、JICA職員の奥本将勝さん。大学の設立からJICAが支援する初のケースとなったプロジェクトの現場で奮闘している。

### 貧

しい国の人々にも、それぞれ自分の夢を持つ権利はある。私は高校生のころにこうした思いを抱き、大学では、紛争後の緊急支援から復興支援まで切れ目なくつないでいくという緒方貞子JICA理事長の理念を、現場で実践してみたいと考えるようになりました。

大学時代を体育会バスケットボール部で過ごし、ほとんど海外経験のなかった私でしたが、JICAへ就職し西アフリカのガーナ、シエラレオネでの新人研修の機会に恵まれました。そこで、困難に直面しながらも明るく希望を捨てないアフリカの人々に勇気をもらいながら、自分の信念が間違っていないことを確信しました。

研修を終え帰国してからは、JICA本部の人間開発部に配属され、開発途上国の大学を支援する高等教育、平和構築に関する職業訓練・技術教育のプロジェクトを担当しました。そこで出会ったのが「エジプト日本科学技術大学（E-JUST）設立プロジェクト」だったのです（4ページに関連記事）。

E-JUSTには、科学技術の知の拠点として、エジプトだけでなく中東やアフリカ地域へ貢献していくことが期待されていました。大学の設立に向け、

JICAの協力の枠組みを超えてオーラジャンパンとしての協力を目指すというスケールの大きさに魅せられ、専門家としてエジプト・アレキサンドリアへ行くことを希望しました。

すでに赴任してから1年がたちますが、日々試行錯誤と反省の繰り返しです。ここでは、常に現場の状況を見極め、裁量を持って即時に判断し、柔軟に対応していくことが大切です。そこに、JICA職員が現場に来る意味があるのだと理解しています。

また現場では、派遣されている日本の大学の先生方や専門家の苦勞もはつきりと見てとれます。現場の最前線でも働く日本人の第一の理解者であり味方であることが、JICAの役割であると感じています。

現在は、エジプト側メンバーに大学づくりの全体工程と短期のスケジュールを示し、それに沿って業務を進めているところ。ここでは、相手の意見を尊重しつつも、私たちの考え方や物事の進め方をはつきりと伝え、レスポンスが早い職員を巻き込んでアクションにつなげていくことが大切です。

そうした業務の中で、私の主な役割が予算管理や人事配置、物品確保といった大学の運営を確実に進めるための「組



エジプト日本科学技術大学（E-JUST）設立プロジェクト

**奥本 将勝**

OKUMOTO Masakatsu

大学院卒業後、2006年JICAに就職。アジア第一部、ガーナ事務所、シエラレオネフィールドオフィスでの研修、人間開発部を経て、09年8月より現職。

織づくり」。ここ

をしつかりとし

なければ、当然、

人材育成や研究

などの成果は上

がりません。「人

づくり」から「組

織づくり」へ、J

ICAの技術協

力の新しいチャ

レンジでもある

のです。

日々、忙しさ

の中にあっても、目標を忘れず、日本と

エジプトの人々と一体感を持って取り組

んでいきたいと思えます。将来は、中東・

アフリカの人々とともにE-JUSTを

発展させ、科学技術がこの地域の「平和

構築」にもつながってほしいと願って

ます。

今年の6月3日、カイロでE-JUST

Tのオープニングセレモニーに緒方理事

長が出席した時、私から尋ねました。

「E-JUSTはいかがでしたか」

「よくぞここまで来ました。これから

もよろしく願いますね」

E-JUSTと私自身へ、これから始

まる新しいステージへのエールだと感じ

ました。



E-JUSTのオープニングセレモニー前日、緒方理事長に仮校舎を案内した